

ヨハネスブルクの国際空港ラウンジで原稿を書いている。2年ぶりのアフリカ、ザンビアからの帰路だ。ここからは香港を経由して約20時間、明日の夜には東京へ着く。アフリカは遠いと実感する。

今回のアフリカは、ザンビアで活動する青年海外協力隊多隊員の活動の視察と評価だ。水道水や電気のない環境で活動している日本の若者がいる。現地の人々と交流しながら活動を続けている。

青年海外協力隊は、現在、アジア、アフリカ、中近東、中南米、大洋州、東欧などの国へ日本の若者を派遣しているが、その歴史は、50年ほど前にさかのぼる。

日本の若者を海外へ派遣しようという計画は、1957(昭和32)



やまもと たいちろう  
山本 太一郎

# ザンビア

年ごろから構想されていた。その3年前の54(昭和29)年、コンゴ計画への参加を表明して、戦後国際社会における国際協力を開始した日本が、協力の二環として構

想した計画のひとつであった。戦後十余年を経過したとはいえ、いまだ貧しい日本が、それでも、海外に向ける若者の熱い思いに比べたいと始まった事業だったという。当時、海外に行くことのできるのは、ごく一部のお金持ちかエリートに限り、65年のラオスへの5人、マレーシアへ5人、フィリ

ピンへ12人、合計で26人の若者が海外へ派遣された。日本は、東京オリンピックを終え、高度経済成長への道をまっしぐらに走り始めたころだった。町には西田佐知子

の「赤坂の夜は更けて」が流れ、第1回のドラフト会議が始まった年だった。隣国中国では文化大革命が始まり、今回訪問したザンビアは、前年に独立したばかりの新しい国として歩み始める。以降、45年間に約3万人の日本の若者が、協力隊員の一人として海外に赴いた。

このたびの東日本大震災でも、多くの隊員経験者がボランティアとして現地へ赴いたという。そこには海外で経験した多くの学びがあったと思う。彼らは多くのことを現地に残すと同時に、多くの経験を日本に持ち帰っている、そんなことを感じたザンビアへの旅だった。

(長崎大熱帯医学研究所教授)